

題目： 協力的人物が迎える結末 - 社会的共有スキーマの日米比較 -

氏名： 佐々木香純

指導教官： 結城雅樹

本研究では、集団内で飛びぬけて多く協力する「突出協力者」に対して人々が持っているスキーマを日米で比較検討することにより、突出協力者がどのように人々に捉えられているかを明らかにし、その傾向が社会生態学的影響によってどのように異なるのかを示すことを目的とする。

Fehr & Fischbacher (2003)は協力者が他者から好意的に評価され報酬を与えられることを示したが、それに反して協力者が嫌がられ罰されるという場面が現実には存在している。本研究ではこのような突出協力者への反応が、社会における対人関係構築の機会の多寡を示す関係流動性という社会生態学的要因によって異なると考えた。

競争的利他主義理論によると、一見すると割に合わない利他行動が生じるのは、その行動が資源を豊富に持つことのシグナルとなり、よりよい交換相手の獲得につながるからである (Barclay & Willer, 2007)。対人関係選択の自由度が高い高関係流動性社会では、資源を豊富に持つ突出協力者は他者に利益を与えるため、他者から希求される。一方で、対人関係選択の自由度が低い低関係流動性社会では、そうした魅力がよりよい対人関係の獲得につながらず、また自分の資源量のアピールが既存の集団内の権力構造の偏りを発生させるため、集団の安定を乱す者として罰の対象となりうる。以上の理論より、高関係流動性社会では突出協力者に対する好意的な共有スキーマが、低関係流動性社会では突出協力者が望ましくないとの共有スキーマが存在するという仮説を立てた。

上記の仮説を検討するため、日米で質問紙実験を行った。質問紙は突出協力者が登場するシナリオを用いた場面想定法であり、参加者は周囲の突出協力者に対する最も一般的な反応を予測し自由記述で回答した。得られた回答をコーディングによってポジティブスキーマとネガティブスキーマに分け、比較した。その結果、アメリカ人の方が日本人よりも全体として突出協力者に対するポジティブスキーマを多く持つことが示された。また、突出協力者が自らの行動が突出的であることを明確に意識している複数のシナリオにおいては、日本の方が突出協力者に対するネガティブスキーマを多く持っていた。このことより、アメリカ人の方が「突出協力者は周囲の好意的な感情や行動を受ける」との共有スキーマを持っていること、また日本人は「意図的な突出協力が周囲からの否定的な感情や行動を受ける」との共有スキーマを持っていることがわかった。